



マーチィ's ROOM

マーチィ VOICE

まちづくりプレイヤー紹介

本屋水紋 店主 小澤 亮太

2025年7月に前橋市の中央通り商店街に「本屋 水紋」を開店した小澤亮太と申します。民間主導のまちづくりが進む前橋のまちなか。その象徴である白井屋ホテル、馬場川通りからは徒歩3分ほどの場所にあります。

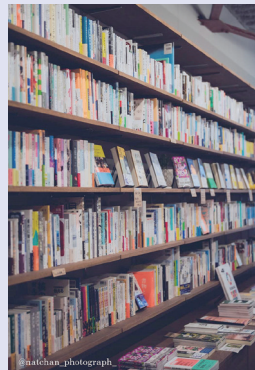
高校まで前橋で過ごし、大学進学とともに上京。出版取次会社で7年間勤務し、2024年の2月にUターン。2024年6月から1年間前橋市中心市街地の地域おこし協力隊として前橋まちなか新聞の取材・執筆、前橋ブックフェスの事務局員、前橋に視察に訪れた方へのまちあるきなどの活動を行っていました。その間に現在の物件を紹介していただき、開業に至りました。昨年11月には一般社団法人太陽の会が主催するmebuku PITCH(前橋市の市街地で開業する人への支援を目的にしたビジネスピッチ)に登壇し、最優秀賞を頂戴しました。



小澤 亮太さん



「本屋水紋」内観



Uターン、地域おこし協力隊を経ての開業ということで、大学生、高校生向けの講義、上毛新聞のオピニオン委員も担当させていただいています。

当店の開店以来の売上上位には『めぶつく』『都市と路上の再編集』『日常3』とまちづくりに関わる本が名を連ねています。民間主導のまちづくりが進む前橋のまちなかに立地する本屋らしい順位です。『都市と路上の再編集』は当店が日本で一番売っ

ているらしく、発行人である株式会社Huuuuの徳谷柿次郎さんをお迎えした出版イベントも行いました。雑誌の定期購読や1冊からの注文といった「まちの本屋さん」としての機能も果たしています。

「まちづくり」という文脈において、本屋は街に必要とされるのでしょうか。ソトコトの編集長である指出一正さんは関係人口が増え、移住者が増えていくまちには「やわらかいインフラ7」があるとしています。前橋に足りなかったものが「おしゃれな本屋」。当店がおしゃれかどうかはお客様の見方次第ですが、いわゆる独立系書店が存在しなかったのは事実であり、そのラストピースとなることができたと自負しています。「本屋が街にあったほうがよい」という明確な根拠はありませんが、多くの方が「あったら嬉しいな」と思う小売店の一つが本屋だと思います。私自身も「本は読んだ方が豊かになる」「本屋は街にないよりあったほうがよい」という思いで、日々営みを続けています。

出版科学研究所の発表によると本屋が一店舗もない自治体は全国で28.6%、群馬県内でも11自治体、31.4%となっています。今後の目標の一つにこういった本へのアクセスポイントを失っている場所で何かしたいというのがあります。本を媒介としたコミュニケーションが広がる場所が県内、全国に広がってほしいと願っています。本がある、本屋があるまちは「いい街」であるはずだから。



「本屋水紋」外観

